

論文提出者氏名 岩下弘史

岩下弘史氏の博士学位請求論文「夏目漱石とウィリアム・ジェイムズ『文学論』から「即天去私」へ」は、アメリカの哲学者ウィリアム・ジェイムズ思想が夏目漱石の文学観にいかなる影響を残し、いかなるかたちで作品に流れ込んだかを、『文学論』に代表される漱石の理論的著作や、未完におわった晩年の小説『明暗』を読みとくことで実証しようとした、意欲的な研究である。

夏目漱石の『文学論』冒頭におかれた「凡そ文学的内容の形式は(F+f)なることを要す。Fは焦点的印象又は観念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す。」という有名な公式の理解・解釈については、漱石没後より様々な説が唱えられてきた。岩下氏はこれら諸説を検討し、漱石が参看したとされる英米の哲学、心理学の議論を原典に遡って確認することにより、説得力のある解釈を導き出す。学説上の論争に終止符を打とうとする姿勢は高く評価できる。

論文は第一章「『文学論』の(F+f)」、第二章「『文学論』における「文芸上の真」」、第三章「「文芸の哲学的基礎」―「理想」と「還元的感化」」、第四章「「作家の態度」と「思ひ出す事など」―漱石の二つの立場」、第五章「『明暗』を読む」、及び「はじめに」と「おわりに」からなる。以下、論文の構成にしたがって概略を記す。

漱石に及ぼしたジェイムズの影響を指摘することは目新しいことではない。漱石自身ジェイムズに言及することが多いからである。岩下氏は、漱石研究がほとんど手をつけずにきたジェイムズ研究の二次文献を参照しながら、ジェイムズ解釈の立場から漱石のテキストを照射しようとする。それによって、ジェイムズ思想の二つの要素であるプラグマティズムと神秘主義の両者がともに漱石によって受容されていたこと、これらが「自己本位」と「則天去私」の思想につながっていることが明らかになる。「はじめに」に於いてジェイムズ研究の初志を述べる岩下氏の比較研究の見通しが、ここに示される。

第一章は『文学論』冒頭の公式が『心理学原理』を著したジェイムズの「意識の流れ」説に拠ることを論じる。公式(F+f)の理解において、従来は「印象又は観念」という用語を手がかりにヒュームの哲学が重視された。これに対し岩下氏は、連合主義的心理学に反対の立場をとったジェイムズの「意識の流れ」説に着目する。ジェイムズによれば人間の心は「実質的部分」と「推移的部分」からなる。漱石の(F+f)は、あるものを概念的に認識しかつ情緒を得るという事態を「意識の流れ」の中の一時的なひとまとまりとして定式化したものである。文学作品が惹起するわれわれの情緒は前後の文脈や経験による。そのことを含意する公式(F+f)は漱石が奉ずる「自己本位」の立場を鮮明に表すとされるのである。

第二章は「文芸上の真」をジェイムズの『宗教的経験の諸相』との関連において検討する。「文芸上の真」はイギリスロマン派の詩人、批評家が自然科学の方法に対し詩を擁護する際に用いた概念である。漱石はその点を十分意識したが、『文学論』執筆の際に残したメモは、むしろジェイムズの「宗教上の真」に拠った可能性を示唆する。岩下氏はここに「自己本位」と共鳴する思想をみるのである。

第三章は「文芸の哲学的基礎」を論じる。この評論の基本的発想をめぐっては、従来ジ

ジェイムズの心理学説の影響を説く立場と、ロイド・モーガンの影響を重視する立場とがあった。岩下氏は安易にジェイムズの思想と関連づけることは慎みつつも、「理想」及び「還元的感化」という概念にジェイムズの発想との類縁性がみられることを確認する。また、読者の意識が作品をなかだちに作者の意識と融合することを謂う「還元的感化」が、『宗教的経験の諸相』にみられる宗教的体験の記述に通ずることを指摘する。岩下氏はここに「則天去私」の契機をみる。

第四章は「作家の態度」と「思い出す事など」を手がかりに、あらためて「自己本位」と「則天去私」を論ずる。「自己本位」の立場は「理論の承認」を経ていることを漱石は語るが、岩下氏はこの「理論」が『心理学原理』に展開する「世界」に関する説であると考える。われわれは個人の選択によって世界をよりよいものへ展いてゆくとする説である。一方で「自己本位」は独我論に陥る危険性を帯びる。岩下氏は「則天去私」が自己と他者との関係をめぐる晩年の漱石の関心を反映しており、ジェイムズの『多元的宇宙』で紹介されるベルクソンの説への共感につながることを主張する。

第五章は先行の四章と趣をかえて漱石の『明暗』を「則天去私」との関連で論ずる。『明暗』と「則天去私」には多くの研究文献が存在するが、弟子たちによる漱石神話と結びつく「則天去私」は多くの批判にさらされ、今日の漱石研究で論じられることは稀である。ただし、ジェイムズとの関連で「則天去私」を論じた岩下氏が、あらためて「則天去私」と『明暗』との関係を取りあげることには大きな意味が認められるであろう。漱石を対象とする本論文において、小説作品のうち『明暗』のみが論じられる理由はそこにある。

岩下氏は『明暗』のあらすじを確認した上で、『明暗』では津田とお延という夫婦が主人公であり、二人がしばしば互いに嘘をつき「他者」を「コントロール」しようとする点を指摘する。かれらは「戦争」の譬喩で表される関係を「他者」と取り結ぶ。だが「他者」は容易にコントロールできない。漱石はそこに「暗い不可思議な力」を見るが、この「不可思議な力」は『明暗』において「偶然」と結びつけられる。われわれは「他者」を前にいかにすべきか。岩下氏は、これに対する答えとして漱石が宗教的なものを考えていたと仮定し、そこに『宗教的経験の諸相』との発想の類似を指摘する。『明暗』では津田夫婦の「融け合い」が語られる。これは、われわれの意識が融け合っているとするジェイムズの『多元的宇宙』の議論と共通する世界観を表すことばである。それはまさに「則天去私」の世界である。そう岩下氏は考えるのである。

以上のように要約される本論文に対して、審査委員からは、漱石とジェイムズとの関係を、漱石の側からではなく、ジェイムズの側から読み解いた新しさを高く評価する意見が出された。留学先のアメリカで触れたジェイムズ研究が日本近代文学研究に接続されたのは、比較文学研究にもたらされた大きな収穫であろう。一方で審査委員からは『明暗』の読みに対して多くの疑問が寄せられた。文学研究の近年の成果であるテキスト論的視点が希薄であることへの危惧も表明された。また「則天去私」の解釈になお再考すべき点のあることも指摘された。論文題目が本論文の内容を必ずしも正確に言い止めたものでないことを惜しむ意見もある。ただし、以上の指摘は今後の課題として審査委員から示されたにすぎず、本論文の優れた学問的成果の価値をなんら損なうものではない。

よって本審査委員会は、岩下弘史氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと認定することで、全員一致の合意をみた。